

書評

『詩経』から秋瑾まで

——七言絶句でつづられた中国詩歌の歴史

周先民『以詩論詩 詠中華詩史絶句二百首』を読む——

三 野 豊 浩

中国には古来「詩によって詩を論じる」伝統がある。有名なものに限っても、古くは唐の杜甫に「戯為六絶句（戯れに六絶句を為る）」の連作があり、近くは金の元好問に「論詩三十首」、より近くは清の趙翼に「論詩五首」、同じく姚瑩に「論詩絶句六十首」がある。形式はいずれも七言絶句で、過去の詩人たちとその作品を縦横に論評する内容である。ここに紹介する周先民氏の『詩を以て詩を論ず 中華の詩史を詠ずる絶句二百首』は、何と全二百首もの七言絶句によって悠久なる中国の詩の歴史をつづった大作であり、古き良き伝統を継承し、更に存分に発展させたものと言えよう。発行は北京の研究出版社。初版は2025年5月。原文は簡体字横書きの中国語で、原書の表記では《以诗论诗 咏中华诗史绝句二百首》となる。

著者の周氏は江蘇省南京の出身。1990年に来日して以来、名古屋大学の今鷹眞氏に師事。長年にわたり中国語教育に携わり、そのためのテキストも作っている。文学博士で、現在名古屋市在住（ちなみに南京と名古屋は姉妹友好都市）。主な論著に『李商隠無題詩構思特点』（『文学評論』1984年2期）、『司馬遷的史伝文学世界』（台湾文津出版社、1995年10月）、『中国歴代僧詩選』（南京大学出版社、1991年6月）があり、主な訳書に小川環樹『風と雲——中国詩文論集』（中華書局、2005年7月）、狩野直喜『中国学文藝』（中華書局、2011年4月）、柳田國男『孤猿隨筆』（北京師範大学出版社、2018年7月）がある。教養あふれる「書香門第」の出身である氏の人となりは、その詩にもよく表れている。一読して実に才気煥発、機知縦横。加えて、その七言絶句はすべて端整な近体詩であり、押韻、平仄いずれも完璧である。現代においてこれだけの作品を書ける人は、中国人でもそう多くはいないのではなかろうか。

詩は先秦からはじまり、漢、魏晉、南北朝、隋唐、宋、元、明、清と続き、それぞれの時代の代表的な作者や作品が縦横に紹介され、論評されて行く。重要度の高い作者、特に唐宋の詩人たちは、複数の詩にうたわれている場合もある。中でも唐の李白、杜甫、李商隠、宋の蘇軾、陸游の五名は、各四首の詩にうたわれている。これに次ぐのが唐の白居易と宋

の王安石^{おうあんせき}の各三首。晋の陶淵明^{とうえんめい}、唐の王維^{おう い}、韓愈^{かん ゆ}、杜牧^{と ぼく}、宋の梅堯臣^{ぼいぎょうしん}、歐陽修^{おうようしゅう}、黃庭堅^{こうていけん}、陳与義^{ちん よ ぎ}、范成大^{はんせいだい}、楊万里^{ようばん り}は各二首。元明清の詩人たちは、すべて一首のみである。

二百首の前に「序」と「弁言」がある。「序」は南山大学名誉教授の蔡毅氏^{さい き}によるもの。蔡氏は周氏と同じ南京出身で、現在南山大学名誉教授（ウィキペディアに紹介あり）。「弁言」は周氏自身によるもの。四六駢儷文^{しろうべんれいぶん}ではないが、対句を多用した端正かつ流麗典雅な文体で本書の内容を概説しており、氏の教養の高さと深さをうかがわせる。以下、本書に収録されている二百首を「走馬看花」式に順を追って紹介していくことにしよう。それぞれの詩の後には簡単な作者および作品の紹介が付記され、また各章の詩人たちは原則として生年の順に配列されている。なお周氏の詩題はゴチック体で示す。

先秦（九首）

中国の詩歌の歴史は、紀元前の周の時代に成立した『詩経』^{しきやう}に始まる。周氏の詩を紹介しよう。

国風雅頌四言句 国風 雅 頌 四言の句
 賦比興成多疊章 賦 比 興 成りて 疊章 多し
 情動於中辭発外 情 中^{うち}に動き 辞 外に発す
 詩篇三百意何長 詩篇三百 意 何ぞ長き

『詩経』は四言を首とし、別名を「詩三百」という。周氏はまず『詩経』を総論し、それからその構成要素である「国風」「雅」「頌」のそれぞれについて詩を作っている。

次は、『詩経』と並ぶ中国詩歌の源流である『楚辞』^{そし}。戦国時代の終わり頃、南方の楚の国で成立した。その代表的作者である屈原^{くつげん}、その代表作「離騷」^{り そう}、さらに「九章」^{きゅうしょう}「九歌」^{きゅう か}がうたわれる。『楚辞』の作品は、「兮」「些」などの文字を多用する「騷体」^{そうたい}で書かれているのが特色。なお周氏は「九弁」^{きゅうべん}の宋玉^{そうぎょく}の詩は作っていない。

漢（三首）

漢の時代は、前漢^{ぜんかん}、後漢^{ごかん}、間にはさまる新^{しん}をあわせて約四百年続く。「漢」という文字は漢字、漢文、漢詩など、今でも中国の代名詞として使われるほどで、現在に至る中国の土台が形成された重要な時代である。詩歌の面では、雑言^{ざつごん}の歌謡である楽府^{がふ}が栄えた。周氏はまづ漢楽府を詩にうたっている。それらはやがて整った字数に整備されて行き、後漢の頃に五

言詩が発生する。その中でもよく知られるのが「孔雀東南飛」^{くじやくとうなん ひ}、別名「古詩為焦仲卿妻作（古詩 焦 仲 卿の妻の為に作る）」である。周氏の詩を紹介しよう。

古詩叙事本尋常	古詩 事を叙するは本より尋常 ^{もと}
可惜歴来多短章	惜しむべし 歴来 短章多きを
巨製鴻篇洵罕見	巨製 ^{きよせい} 鴻篇 ^{こうへん} 洵 ^{まこと} に罕 ^{まれ} に見る
民歌史上永流芳	民歌史上 永く芳を流す

短編が多い漢詩の中で、「孔雀東南飛」はまれに見る長編である。それとは別に、『文選』^{もんぜん}に収録されている無名氏の「古詩十九首」^{こ し じゅうきゅうしゅ}がある。漢の時代はどちらかと言えば詩よりも文（賦）の栄えた時代であるためか、漢の詩は以上三首のみである。

魏晉（十一首）

後漢の末に天下が乱れ、動乱の時代となる。まず『三国志演義』の悪役として有名な乱世の奸雄こと曹操^{そうそう}。彼は、当時を代表する詩人でもあった。それからその二人の息子曹丕^{そうひ}と曹植^{しよく}。彼らは父の曹操と共に「三曹」と称される。特に曹植は「七歩の才」として名高い。次は、戦乱の中で数奇な運命をたどり「悲憤詩」をつづった女性詩人の蔡琰^{さいえん}。当時の文学のあり方は「建安風骨」^{けんあんふうこつ}と称される。「建安」は後漢末の献帝^{けんてい}の年号。周氏の詩を紹介しよう。

建安風骨究何在	建安の風骨 究に何くにか在る ^あ
王粲登楼感七哀	王粲 ^{おうさん} 楼に登り ^{ちくりん} 七哀 ^{しちあい} に感ず
直面人生凄苦状	人生の凄苦の状に直面し
悲涼慷慨欲馳才	悲涼 慷慨 才を馳せんと欲す ^は

王粲^{おうさん}は曹操の下に集った建安七子の代表格で、「登楼の賦」と「七哀詩」^{しちあい}で知られる。

やや時代が下り、魏晉の王朝交代期に活躍したのが「竹林の七賢」である。周氏はその代表格で、「詠懷詩」^{えいかい}で名高い阮籍^{げんせき}をうたっている。当時の文学は、年号をとって「正始之音」^{せいし の いん}と称される。周氏は、もう一人の代表である嵇康^{けいこう}の詩は作っていない。

魏^ぎ、蜀^{しよく}、呉^{しん}の三国は晋（西晋）^{せいしん}によって統一され、太康^{たいこう}という年号の下、太平ムードの中で貴族趣味的な修辞の文学が栄える。周氏はこの時代を「太康詩風」^{たいこう し ふう}の一首にうたっている。当時を代表する詩人たちは三張^{さんちやう}二陸^{にりく}両潘^{りやうはん}一左^{いさ}と総称されるが、最も代表的なのは「三都の賦」^{さんし}を書いて洛陽の紙価を高からしめた左思である。

西晋は八王の乱とそれに連動する異民族の侵入によって滅亡し、その後華北は五胡十六国の混戦状態となる。晋の王族と貴族たちは南に逃げ延び、東晋の時代となる。東晋の終わりに出たのが大詩人陶淵明であり、隠逸詩人、田園詩人として名高い。周氏の詩を紹介しよう（二首の其一）。

性愛丘山欣忘情	性 丘山を愛し 欣びて情を忘る
帰耕南畝鄙公卿	南畝に帰耕し 公卿を鄙とす
任真自得遠車馬	真に任せ自得し 車馬を遠ざく
隱逸之宗豈枉名	隱逸の宗 豈に名を枉げんや

なお魏晉および次の南北朝時代は、五言古詩が主要な形式となる。

南北朝（九首）

この時代は中国が南北に分断され、それぞれに王朝交代を繰り返す。南朝は宋、齊、梁、陳。北朝は北魏、北齊、北周。最後は北朝から出た隋によって南北が統一される。

まず南朝宋の謝靈運は山水詩人として知られ、同時代の鮑照は樂府詩で有名。宋の代表的な詩人としてもう一人、「五君詠」の顔延之がいるが、周氏は詩を作っていない。

南朝齊の沈約と謝朓は詩の格律化に貢献し、その詩風は永明体と呼ばれる。この頃提唱された「四声八病」の説は、後に近体詩の平仄へとつながって行く。

南朝の梁から北朝に入った庾信は、南北朝の最後を飾る存在。「哀江南賦」で知られる。南北朝時代には他にも多くの詩人がいるが、枚挙にいとまがないので、最も代表的な人物に限ったのであろうか。たとえば『文選』の編者である昭明太子蕭統、「玉樹後庭花」の陳叔宝（陳の後主）など。いずれも有名であるが、周氏は詩を作っていない。

それから、南北朝の民歌がうたわれる。まず「北朝民歌」。その代表的な「木蘭辞」は、男装の女性戦士木蘭の活躍をうたう。周氏の詩を紹介しよう。

長詩叙事塑奇人	長詩 事を叙し 奇人を 塑る
颯爽英姿若女神	颯爽たる英姿 女神の若し
審美何須問出処	審美 何ぞ須いん 出 処を問うを
花開千載色猶新	花開きて千載 色 猶お新たなり

木蘭従軍の物語は、ディズニーのアニメ映画「ムーラン」の題材にもなった。

最後は「南^{なん}朝^{ちよう}民^{みん}歌^か」,そしてその代表的な「西^{せい}洲^{しゆう}曲^{きよく}」。残念ながら「子^し夜^や歌^か」の詩はない。

隋唐（六十二首）

南北朝を統一した隋^{ずい}は短命に終わるが、それを承けた唐^{とう}は詩歌の黄金時代であり、有名詩人を多数輩出した。中でも李白と杜甫を生んだ盛唐の時代は、その頂点に位置する。

最初^{じんじつしき}は「人日思^き婦」で知られる隋^{せつどうこう}の薛^{せつ}道^{どう}衡^{こう}。以下はすべて唐の詩人たちである。まずは「寒山詩」で有名な詩僧の寒^{かん}山^{ざん}。以下、初唐^{しよとう},盛唐^{せいとう},中唐^{ちゆうとう},晩唐^{ばんとう}の順に詩人たちが紹介される。

まず初唐。その代表は「王^{おう}楊^{よう}盧^ろ駱^{らく}」の初唐四傑である。周氏は総論の詩の後に四人を個別にうたっている。すなわち「長^{ちやう}安^{あん}古^こ意^い」の盧^ろ照^{しやう}鄰^{りん},「易^{えき}水^{すい}送^{そう}別^{べつ}」の駱^{らく}賓^{ひん}王^{わう},「滕^{とう}王^{おう}閣^{かく}」の王^{わう}勃^{ぼつ},「從^{じゆう}軍^{ぐん}行^{こう}」の楊^{よう}炯^{けい}である。さらに「代^{だい}悲^ひ白^{はく}頭^{とう}翁^{おう}（白頭を悲しむ翁に代わりて）」の劉^{りゆう}希^き夷^い,律詩の確立に功績のある宋^{そう}之^し問^{もん}（併称される沈^{しん}佺^{せん}期^きの詩はない）。「登^{とう}幽^{ゆう}州^{しゅう}台^{たい}歌^か（幽州の台に登る歌）」の陳^{ちん}子^す昂^{ごう}は、盛唐の詩風の先駆となった。そして「春^{しゅん}江^{かう}花^か月^{げつ}夜^や」の張^{ちやう}若^{じやく}虚^{きよ}。この時代は、長編の七言古詩に名作が多い。

次は盛唐。近体詩が確立し、五言と七言の律詩、絶句、古詩のすべてが出揃う。まず開元^{かいげん}の治^ちを支えた名宰相の張^{ちやう}九^{きよく}齡^{れい}。「登^{かん}鶴^{かく}雀^{じやく}楼^{ろう}（鶴雀楼に登る）」の王^{おう}之^し渙^{かん}。「春^{しゅん}曉^{ぎやう}」の孟^{もう}浩^{こう}然^{ぜん}。「竹^{ちく}里^り館^{かん}」の王^{おう}維^いは、孟浩然と共に山水詩人として名高い。周氏の詩を紹介しよう（二首の其一）。

半官半隱善全身	半 ^{なか} ば官 半 ^{なか} ば隱にて 善く身を全うす
学道学禅離俗塵	道を学び 禅を学び 俗塵を離る
擅画擅詩長律呂	画 ^{ほし} を 擅 ^し に 詩 ^{ほし} を 擅 ^し に 律呂に長ず
開元天宝一高人	開元天宝の一 ^{かいげんてんぼう} 高人

詩のみならず画や音楽にも秀でていた王維の多芸多才ぶりを、たくみにうたっている。

次は、七言絶句の名手王^{おう}昌^{しやう}齡^{れい}。辺塞詩人の高^{こう}適^{せき}。そして盛唐の最も代表的な詩人である李^り白^{はく}と杜^と甫^ほ。周氏の李白の詩を紹介しよう（四首の其一）。

太白之詩天上来	太 ^{たい} 白 ^{はく} の詩 天上より来たり
従心所欲任馳才	心の欲する所に従い 才の馳するに任す
酒酣興発驚神鬼	酒 ^{たけなわ} 酣 にして興を発し 神鬼 ^{しんき} を驚かす
疑是仙人貶謫回	疑うらくは是れ仙人の貶謫より回るか

李白は、その浮世離れした人柄から「謫仙人^{たくせんじん}」とあだ名された。次に杜甫の詩を紹介しよう（四首の其一）。

語不驚人死不休	語 人を驚かさずんば 死すとも休まず
一生只為好詩謀	一生 只だ好き詩の為に謀る
嘔心瀝血耽佳句	心を嘔き 血を瀝ぎ 佳句に耽る
尽善尽工誰可儔	善を尽くし 工を尽くし 誰か 儔 ^{ともがら} となるべけん

並ぶ者無き大詩人として、言葉を尽くして杜甫をたたえている。

それから、高適と並び称される辺塞詩人の岑參^{しんじん}。中唐の新楽府運動の先駆となった元結^{げんけつ}。

次は中唐。五言の長城と呼ばれた劉長卿^{りゅうちょうけい}。五言律詩の名手戴叔倫^{たいしゅくりん}。山水詩人の韋應物^{いおうぶつ}。大曆十才子の李益^{たいれきじゅっさいし}。苦吟で知られる孟郊^{りえき}。楽府詩で有名な張籍^{ちやうせき}と王建^{おうけん}。唐宋八大家に数えられる韓愈^{かんゆ}。女性詩人の薛濤^{せつとう}。「烏衣巷」の劉禹錫^{りゅううしやく}と続く。

中唐の最も代表的な詩人である白居易^{はくきょい}（楽天）は、『源氏物語』や『枕草子』など日本の平安文学にも影響を及ぼした。周氏の詩を紹介しよう（三首の其一）。

其字其人皆樂天	其の人 其の字 ^{あざな} 皆な樂天
中唐屈指一詩仙	中唐屈指の一詩仙
婦孺能唱琵琶曲	婦孺も能く唱す 琵琶の曲
源氏或縁長恨篇	源氏 或いは長恨の篇に縁するか

長編の七言古詩「長恨歌^{ちやうごん か}」と「琵琶行^{び わ こう}」は、いずれも白居易の代表作である。

「江雪^{かうせつ}」の柳宗元^{りゅうそうげん}は、盛唐の王維、孟浩然、中唐の韋應物と共に山水詩の大家として名高く、「王孟韋柳」を併称される。次は「元白の交わり」で知られる白居易の親友元稹^{げんしん}。

推敲で知られる賈島^{かとう}、早逝の鬼才李賀^{りが}、苦吟の孟郊^{もうこう}は、いずれも韓愈の門人である。

最後は晩唐。「咸陽城東樓^{かんようじやうとうろう}」の許渾^{きょこん}。晩唐の代表詩人で風流才子の杜牧。重字の運用に功みな李群玉^{りぐんぎよく}。温庭筠^{おんていいん}は女性詩人魚玄機^{ぎょげんき}の師で、詩のみならず詞でも定評がある。周氏は魚玄機の詩は作っていない。

そして、杜牧と並ぶ晩唐の代表詩人李商隱^{りしやういん}。耽美的な「無題」詩を多く書き、律詩の作者として定評がある。周氏の詩を紹介しよう（四首の其二）。

詩苑晩唐生玉溪	詩苑 晩唐 玉溪を生ず
猶如大旱現雲霓	猶お大旱に雲霓 ^{うんげい} の現るるが如し

精微絶句無其右 精微なる絶句は其の右無く
七律名高与杜齊 七律は名高きこと杜と齊し

「玉溪」は李商隱の号。「杜」は、盛唐の杜甫である。杜牧をうたう詩も紹介したいが、紙幅の都合で割愛する。前述のように周氏は李商隱には李白、杜甫と並ぶ四首の詩を贈っており、彼を重視していることは明らかであろう。

さらに唐末の乱世を生きた詩人たち。羅隱、陸龜蒙、杜荀鶴、詩僧の貫休。そして皮日休、「秦婦吟」の韋莊と続く。最後は「香奩体」の韓偓である。

宋（四十九首）

唐と五代の後に興った宋は、前半の北宋と後半の南宋に分かれる。詩の形式は基本的に唐を継承するが、表現の散文化が進み、主知的な傾向が強まる。中唐の頃から発展しはじめた詞は宋に入ってから更に発展し、時代を代表するジャンルとなる。

まず北宋初期。王禹偁は、平明な作風で宋代の詩風の先駆となる。次は、杭州西湖の孤山に隠棲し、梅をこよなく愛した林逋。宰相となり、感傷的な詩を残した寇準。さらに西崑体の錢惟演と続く。

次に、北宋中期。日常生活を題材とする梅堯臣。宋代の文学の基礎を築いた歐陽修。その同志で、蘇州に隠居した蘇舜欽。学者の李覯、画家の文同、歴史書『資治通鑑』の司馬光、大胆な政治改革を行った王安石、その愛弟子の王令と続く。

次は、北宋ひいては宋代最大の詩人蘇軾。続く黄庭堅、秦觀、陳師道、張耒は、いずれも蘇軾の門人である。蘇軾の詩はややわかりにくいので、かわりに黄庭堅の詩を紹介しよう（二首の其一）。

宋詩典雅浸書香 宋詩は典雅にして書香を浸す
介甫馳才始濫觴 介甫 才を馳するは 濫觴の始めなり
博学東坡再接力 博学なる東坡 再び力を接し
奪胎換骨則為黃 奪胎換骨は 則ち黄たり

宋詩は概して主知的であるが、その傾向は王安石（介甫）に始まり、蘇軾（東坡）がそれを助長し、黄庭堅に至ってきわまる。黄庭堅とその一派は「換骨奪胎」をスローガンとし、北宋後期から南宋初期にかけて大きな影響力を持った。これを「江西詩派」と称する。

次は「小東坡」と称される唐庚。詩僧の恵洪は『冷齋夜話』で知られる。

北宋は女真族の金の侵入を受けて滅亡し、南宋の時代となる。北宋から南宋の過渡期に活躍した韓駒、呂本中、曾幾、陳与義はいずれも江西詩派に属し、このうち曾幾は大詩人陸游の師である。劉子翬は、北宋の滅亡を嘆く「汴京紀事」の連作で知られる。

南宋中期。「愛国詩人」の通称で親しまれる陸游（放翁）は南宋の最も代表的な詩人であり、北宋の蘇軾と「蘇陸」と併称される。周氏の詩を紹介しよう（四首の其一）。

躍馬横戈欲試鋒	馬を躍らせ 戈を横たえ 鋒を試さんと欲す
壯心但願九州同	壯心 但だ願う 九州の同じきを
胡塵不掃不瞑目	胡塵 掃わずんば 瞑目せず
亘古男兒一放翁	亘古の男兒 一放翁

陸游は八十五年の長寿を全うしたが、祖国の統一を夢見つつ世を去った。周氏の詩の最後の一句は、梁啓超の七言絶句「読陸放翁集（陸放翁の集を読む）」の詩句をそのまま用いている。

范成大は、南宋の田園詩人。蘇州の農村の四季をうたった「四時田園雜興六十首」で知られる。周氏の詩を紹介しよう（二首の其二）。

四季鄉村記雜興	四季の鄉村 雜興を記す
農民苦樂悲歡情	農民の苦樂 悲歡の情
田園詩統由来久	田園の詩統 由来久し
成大終於集大成	成大は終に集大成なり

楊万里は、軽妙洒脱な「誠齋体」で知られる。その快活な詩風は、あるいは周氏にも影響を及ぼしているのかも知れない。南宋の中興四大家としてもう一人、陸游、范成大、楊万里と併称される尤袤がいるが、周氏は詩を作っていない。朱子学の朱熹は儒学者であるが、詩文にも造詣が深い。

南宋後期。詞人の姜夔、民間詩人たちの集団「江湖派」の先駆となった永嘉四靈。江湖派の代表戴復古と劉克莊。『滄浪詩話』で知られる嚴羽。

南宋の滅亡の際、国難に殉じた状元宰相こと文天祥は、「正気の歌」で名高い。北方に連れ去られる王族たちと運命を共にした汪元量 は宮中の樂士であり、「醉歌」と「湖州の歌」の連作で知られる。

元（七首）

元はモンゴル族による征服王朝であり、雑劇や散曲が栄えた。伝統的な詩文はあまり尊重されないが、規範に縛られない自由さの中でユニークな個性が活躍する。

最初の元好問は、厳密には金の詩人。女真族の金が元に滅ばされ、元にくだった。周氏の詩を紹介しよう。

国亡家破恨無窮	国亡び家破れ 恨み窮まり無し
賦到滄桑句便工	賦して滄桑に到り 句 便ち工なり
更有論詩三十首	更に有り 論詩三十首
平章月旦説群雄	平章 月旦 群雄を説く

書家の趙孟頫は宋の王族であるが、宋を滅ぼした元に仕え、鬱屈した思いを詩にうたっている。その次は元詩四大家のうち楊載と虞集。薩都刺は回族出身で、その『雁門集』は魯迅も愛読した。次はやはり元詩四大家に数えられる揭傒斯。周氏は四大家の残りの一人、范梈の詩は作っていない。最後は「鉄崖体」の楊維禎である。

明（二十一首）

モンゴルの支配を脱し漢民族の天下を回復した明は、前七子、後七子の古文辞派に代表される復古主義の時代となる。しかし、それに対する反発もまた起こった。通俗的な小説が流行した時代でもあり、『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』は四大奇書と呼ばれる。

まず「白燕」の詩の袁凱。次は開国の功臣劉基。それから「呉中四傑」のうち楊基と高啓。特に後者は明代最高の詩人とされる。周氏の詩を紹介しよう。

或曰明詩第一人	或いは曰う 明詩の第一人にして
天才高逸若通神	天才 高逸 神に通ずるが若しと
広師博采糾元弊	広く師とし 博く采り 元の弊を糾し
超拔清新掃俗塵	超拔 清新 俗塵を掃う

次は「台閣体」の三楊。「台閣体」から前後七子への橋渡しとなる李東陽。祝允明、唐寅、文徵明の三人はいずれも蘇州の出身。さらに前七子の李夢陽と何景明、後七子の謝榛。『西遊記』の作者として知られる呉承恩。後七子の李攀龍は、『唐詩選』の編者に擬せら

れる。

徐渭^{じょゑい}は個性的な画家。次は後七子の王世貞^{おうせいいてい}。公安派^{こうあんは}の袁宏道^{えんこうどう}と竟陵派^{きやうりやうは}の鍾惺^{しやうせい}は、それぞれ古文辞派の復古主義に異を唱えた。耽美的な作風の王彦泓^{おうげんおう}は、永井荷風^{ながい か ふう}が愛好した。

明の最後は、国難に殉じた陳子龍^{ちん しりやう}と夏完淳^{か かんじゆん}。特に後者は、明末の志士として名高い。

清（二十九首）

清^{しん}は満州族^{まんしやうぞく}による征服王朝であり、また中国の歴史上最後の封建王朝である。元とは違って漢民族の文化に理解を示し、『四庫全書^{し こぜんしや}』の編纂などの大事業が行われる。考証学^{こうしやうがく}が興り、精緻さを尊ぶ気風の下で、古典的な文化が集大成された。末期になると、帝国主義の脅威が強まる中、進歩的な人々による変革の動きも始まる。清は有名な小説『紅樓夢^{こうろうむ}』が書かれた時代でもあるが、周氏は作者曹雪芹^{そうせつきん}の詩は作っていない。

まず、清初に大きな影響力を持った錢謙益^{せんけんえき}と吳偉業^{ごゐぎやう}。前者は『列朝詩集^{れつちやうししやう}』の編者である。次は学者の顧炎武^{こ えん ぶ}。「南施北宋^{なん し ほうそう}」と併称される宋琬^{そうえん}と施閏章^{し じゆんしやう}。『明詩綜^{みん し そう}』の編者朱彝尊^{しゆ い ぞん}。学者の屈大均^{くつたいきん}。朱彝尊と「南朱北王^{なんしゆほくおう}」と併称される神韻説^{しんいんせつ}の王士禛^{おう してい}。朱彝尊の後継者となった查慎行^{さ しんこう}。十代の若さで科挙に合格したが、数奇な運命をたどった趙執信^{ちやうしつしん}。格調説^{かくちやうせつ}の沈徳潜^{しんとくせん}。『宋詩紀事^{そう し き じ}』の厲鶚^{れいがく}。板橋^{はんきやう}の号で知られる鄭燮^{ていしやう}と続く。

清代中期。性靈説^{せいれいせつ}の袁枚^{えんばい}、それに蒋士銓^{けん し ぜん}、『甌北詩話^{おうほくしわ}』の趙翼^{ちやうよく}の三人は、「乾嘉三大^{けん か}家」と併称される（乾嘉^{けんりやう}は、乾隆^{か けい}と嘉慶^{か けい}）。

詩、書、画、印の「四絶^{し じつ}」とうたわれた黎簡^{れいかん}。北宋・黄庭堅^{こうけいじん}の末裔黄景仁^{こうけいじん}は、薄命の才人。清廉で知られる宋湘^{そうしやう}。大詩人で画家でもある張問陶^{ちやうもんとう}。さらに母親の死に殉じた舒位^{じゆい}、科挙の殿試で状元（主席）となった陳沆^{ちんこう}と続く。

清代後期。「己亥雜詩^{き がいざつ し}」の龔自珍^{きやう じ ちん}。己亥は1839年、アヘン戦争の前年である。以下、啓蒙思想家の魏源^{ぎ げん}、經学家の王闡運^{おうがいうん}、外交官として来日した黄遵憲^{こうじゆんけん}、同光体の陳三立^{ちんさんりつ}、「戊戌^{ぼ じゆつ}の政変」に殉じた譚嗣同^{たん し どう}と続く。そして最後を飾るのは、女性革命家の秋瑾^{しゆきん}をうたう一首。周氏の詩を紹介しよう。

鑑湖女俠亦詩豪	かん こ じよきやう し ごう 鑑湖の女 俠 は亦た詩豪
碧血丹心为国号	へきけつ たんしん ため さけ 碧血 丹心 国の為に号ぶ
莫道激昂含蓄少	い げつこう がんちく 道う莫かれ 激昂して含蓄少なしと
直抒胸臆亦風騷	きやうおく ちやくじよ ふうさう 胸 臆を 直 抒するは亦た風騷

鑑湖^{せんこうしやうしやうこう}は、浙江省 紹興にある湖。周氏は、同じく紹興出身の文豪魯迅^{ろ じん}の詩は作っていない。

い。なお秋瑾の稿の末尾に、「全書草畢於2016年冬，定稿於2023年冬」とある。草稿ができてから決定稿となるまでに，かなり時間が経過していることがわかる。

全二百首の後に「跋語」があり，「乙巳春，東方閑人周先民識於名古屋閑人齋（乙巳の春，とうほうかんじん東方閑人周先民，かんじんさい名古屋の閑人齋にて識す）」とある。乙巳は2025年。

以上，本書の内容を駆け足で紹介した。書評というより，中国文学史概説のようになってしまったが。ちなみに百分比では先秦から南北朝までが16%，隋唐が31%，宋元が28%，明清が25%となる。

紙幅の都合もあり，本稿では周氏の絶句のごく一部しか紹介できなかった。残りの詩も読んでみたいと思われる方は，是非本書を取り寄せていただきたい。周氏の詩はいかにもわかりやすく，中国文学の入門者がそれぞれの時代や作者の特色を把握するには，非常に簡便なものであると思う。ストレート過ぎて「含蓄少」と感じられる方もいるかも知れないが，日本語の訓読ではなく現代中国語で音読してみると，また違った味わいがある。本稿は，周氏の労作を世に知らしめたいという思いと，日本の，特に若い世代の人たちに漢詩の面白さを知ってほしいという思いで書いた。もとより微力な身であるが，本稿が何ほどかの手引きになれば幸いである。

問題は，本書の入手方法である。パソコンに簡体字で「以诗论诗 周先民」と入力すると複数の情報がヒットするが，Amazon ではヒットしない。日本国内で一般の読者が本書を手に入れるには，中国書の専門店で問い合わせるのが早道であろう。

最後に，「弁言」の末尾に記されている周氏の七言律詩を紹介して結びとしたい。

先秦唐宋至明清	先秦 唐宋 明清に至る
華夏文壇代有成	か 華夏の文壇 代々成る有り
大呂黃鍾天地震	たいりょ 大呂 こうしょう 黃鍾 天地 震え
奇思妙構鬼神驚	き 奇思 みょうこう 妙構 鬼神 驚く
隨縁信歩遊詩苑	したが 縁に まか 随い歩に しえん 信せ 詩苑に遊ぶ
趁興觀花擷落英	お 興を み 趁いて花を らくえい 観 落英を つ 擷む
捫燭扣槃君莫笑	ともしび 燭を ひね 捫り はち 槃を たた 扣くとも 君 笑う な 莫かれ
蜻蜓点水亦閑情	せいてい 蜻蜓 水を点ずるは 亦た情に閑す

二〇二六年六月記